

バウムテストの特徴および描画説明と レジリエンスとの関係

児玉 恵美¹・吉岡 和子²・石坂 昌子³

(受付 2018年5月30日)

問題と目的

投映法による心理検査の一つに、バウムテストと呼ばれる木を描く描画法がある。このバウムテストは、その描き方や用紙空間の使い方、描かれた内容などにより、様々に解釈される。臨床現場でバウムテストを見る際、たとえば Bolander, K (1977/1999) に基づき、空間象徴の観点からは、左側が過去や受動性を、右側が未来や積極性を意味することや、左下が依存や発端を、右上が目標や完成を意味すると理解されることがある。また、樹木の描かれ方から、大きく筆圧の高いものは、自信があり活動的で自己主張の高さと関係があると説明されている(高橋・高橋, 1986)。さらに、幹先端処理の観点からは、自我の脆弱性が説明されることがある。山中(1976)は、幹の上端が解放しているために幹の部分で内空間を形成していた曲線が、上部では枝として外空間を形成する「メビウスの木」が統合失調症に特徴的に見られることを述べ、そこから内界と外界が勝手に連結してしまった状態や、自己と他者の関係性の難しさを示唆している。このようにバウムテストは、描かれた樹木に描き手の内界が投影され、多くの場合それを描いた者自身を表すと理解される。ここで高橋・高橋(1986)は、「木」の描画は比較的容易で抵抗が少なく実施できるため無意識の自己が表れやすく、否定的な特性も表すので、心理的成熟度、精神の健康状態、パーソナリティの特性がより深く理解できることを述べている。加えて、佐渡・坂本・岸本・伊藤(2010)によると、バウムテストに関する論文は、本邦において1958年から2009年の間に696編報告されており、それだけバウムテストが臨床現場に広く浸透している検査や技法であり、同時に研究対象になっていることが示されている。

ここで昨今、逞しく生き抜く力の一つとして、レジリエンスへの注目が高まっている。レジリエンスとは、Masterson, A. S., Best, K. & Garmezy, N. (1990) によると、「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程、能力および結果」と定義される。小塩・中

¹広島修道大学健康科学部

²福岡県立大学人間社会学部

³九州ルーテル学院大学人文学部

谷・金子・長嶺（2002）は、レジリエンスの状態にある者とは、困難で脅威的な状況にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応しているもののことであると述べている。そのため、様々なリスクに対する予防要因や緩衝要因を中心とした、健康に関する多くの要因を含む概念であると考えられている。そして、レジリエンスは特別な能力や特性ではなく、誰もが備えており高めることができると言われている（Grothberg, 2003）。ただし研究者によって、レジリエンスを適応の過程、能力、結果のうちどの側面から捉えるかについては、未だ統一的な見解がみられていない。現在国内で見られるレジリエンスを測定する尺度も、レジリエンスをどの側面や要因からアプローチするか、またどの年代を対象とするかなどにより、これまでにいくつか作成・開発されている（たとえば小塩他, 2002；長内・古川, 2004；石毛・武藤, 2005；平野, 2010など）。ここで小塩他（2002）は、レジリエンスの状態を導く心理的特性に注目し、青年期を対象とした「精神的回復力尺度」を作成している。この尺度は、新たな出来事に興味や関心を持ち、様々なことにチャレンジしていこうとする「新奇性追求」、自分の感情をうまく制御することができる「感情調整」、明るくポジティブな未来を予想し、その将来に向けて努力しようとする「肯定的な未来志向」の3因子からなる。そして、ネガティブな出来事の生起と自尊心との関係から、精神的回復力が危機やストレスに対して常に有効な予防要因になっているわけではなく、個人が危機に陥った状況において、特に重要な役割を担うことが示されている（小塩他, 2002）。

個人が意識できていない側面を積極的に見出そうとする投映法において、描かれた樹木に描者自身が表されるとするならば、個人のレジリエンスはバウムテストにどのように示されるのであろうか。もしそれを何らかの形で読み取ることができるとしたら、臨床場面において、クライアントの現状だけでなく予後を予測する際にも役立つと考える。先述したことに当てはめると、レジリエンスの強さは、たとえば樹木画サイズの大きさ、用紙空間における右側よりの描写、幹先端が閉じていることなどに示されることが予想される。加えて、樹木について、それを描いた者がどのような意味付けを行っているかは、描画を理解する上で重要な要素である。筆者らが調べたところ、これまで本邦において、バウムテストについて描いた者自身による説明をまとめた研究は見当たらない。

以上より本研究では、バウムテストにみられる種々の描画指標および描画後の説明とレジリエンスとの関係を検討することを目的とする。その際レジリエンスについては、レジリエンスを導く多様な要因が想定されていることに鑑み、下位尺度ごとに検討を行う。

方 法

対象者

広島県 A 大学，福岡県 B 大学，熊本県 C 大学に在籍する大学生・大学院生148名（男性55名，女性93名，平均年齢20.59歳， $SD=2.45$ ）。

調査時期

2016年11月～2017年12月

調査内容

バウムテスト

A4版の白紙，HB の鉛筆，消しゴムを配布し，「木を一本描いてください」，「できるだけ丁寧に描いてください」と教示を行った。なお，現在本邦においてもっともよく使用される教示は「実のなる木を一本描いてください」であるが（中島，2002），高橋（1994）は，実のなる木と限定しないで描かれた木に自発的に果実が描かれたときに，それが象徴的な意味をもつことを指摘している。今回は高橋（1994）に従い，「木を一本描いてください」の教示とした。

バウムテストに関する質問紙

高橋・高橋（1986）の描画後の質問を元に，以下の自由記述形式の質問紙を作成した。

①何の木ですか，②どうしてこの木を思いつかれたのでしょうか，③この木はどこに生えている木でしょうか，④この木に必要なものは何でしょうか

レジリエンス

レジリエンスの状態に結びつきやすい心理的特性として，精神的回復力を測定する精神的回復力尺度 Adolescent Resilience Scale（小塩他，2002）を使用した。21項目から構成されており，“いろいろなことにチャレンジするのが好きだ”，“新しいことや珍しいことが好きだ”などの項目を含む「新奇性追求」，“自分の感情をコントロールできるほうだ”，“怒りを感じるとおさえられなくなる（逆転項目）”などの項目を含む「感情調整」，“自分の未来にはきっといいことがあると思う”，“将来の見通しは明るいと思う”などの項目を含む「肯定的な未来志向」の3因子からなり，「はい（5点）」～「いいえ（1点）」の5段階で回答を求めた。

手続き

各大学にて，講義の一部または講義終了後の時間に集団で実施した。最初にバウムテストを行った。次に，バウムテストが完成した人に，描いた樹木とレジリエンスに関する質問紙を配布し，質問紙の表紙にあらかじめ記載されている任意のナンバーを描画用紙の裏に記載してもらった。このナンバーは質問紙と描画とを対応させるために使用した。その後，各々で質問紙に回答してもらった。なお調査実施の前に，参加は任意でありいつでも本人の意思により中止することが可能であること，調査で取得した個人情報の管理を徹底することを説明した。

バウムテスト分析方法

描画のサイズは、描かれた樹木の最下端から最上端までの垂直方向での長さを「高さ」とし、最右端から最左端までの水平方向での長さを「樹木幅」とした。その際、用紙からはみ出ているものについては、用紙に描かれている部分を測定値とした。さらに、「幹幅」（地面がある場合：樹冠の最下端と地面との中間地点での幹横幅、地面がない場合：樹冠の最下端と根元の分かれ目の中間地点の幹横幅）も測定した。なお、描画位置については井手・岩淵（1991）を参考に、用紙の10分の1を測定単位とし、描かれた樹木の垂直方向と水平方向の中心点を指標として、描画用紙の中心点からの垂直・水平方向へのズレ距離を測定した。

バウムテストの分類は、佐渡・坂本・伊藤（2009）の読み取り指標を参考とした。「描線」、「幹先端処理」、「幹表面の描写」、「樹冠」は元来の指標通りに分類し、そのうち幹先端処理については本研究においても佐渡他（2009）と同様に、岸本（2002）に従い「開放型（完全開放型、先端漏洩型、冠漏洩型、閉鎖不全型）」、「閉鎖型（冠型、放散型、基本型、その他の閉鎖型）」、「その他」に分類した（Table 1）。さらに「枝」、「根」についても、「実」、「葉」、「花」、「地平」、「風景・付属物」と同様に「ある／なし」で分類を行った。また、独自の指標として「幹の傷」、「陰影」についても「ある／なし」での分類を加えた。

なお、バウムテストのサイズ・位置の測定、分類は、筆者ら三名で測定および評価がなされ、意見が一致しなかったものについてはその都度合議の上、決定された。

Table 1 幹先端処理の分類（岸本，2002による）

開放型	
完全開放型	幹先端処理による輪郭閉鎖を完全に放棄したのか、あるいは全く無関心とも受け取れる
先端漏洩型	幹の先端、もしくは枝先が先細りになって閉じようとはしているが、完全に閉じていないために、幹の内空間が外界と交通してしまう
冠漏洩型	樹冠が描かれているが、その輪郭に隙間が2カ所以上あるため、幹の内空間が外界に漏洩してしまう
閉鎖不全型	上記以外の方法で先端を閉じようとなんらかの努力をしているが、うまくいっていない
閉鎖型	
冠型	幹先端の処理を放棄して、樹冠の輪郭を描くことで全姿の輪郭を閉じている
放散型	幹先端処理にあたって、幹の先端をそのまま枝分かれさせる
基本型	幹先端が一本のまま細くなってそのまま閉じ、幹の上部には同じように描かれた枝が概ね互生している
その他の閉鎖型	上記以外の閉鎖型
その他	一線幹とか、全体が描かれていなくて、開放・閉鎖の区別ができない

結 果

まず、精神的回復力尺度下位尺度の「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」について、平均値（標準偏差）と中央値を算出し、各因子の高群・低群を設定した（「新奇性追求」：高群25点以上／低群24点未満, 「感情調整」：高群28点以上／低群27点未満, 「肯定的な未来志向」：高群17点以上／低群16点未満）(Table 2)。

1. 描画サイズ, 描画位置に見られる特徴

描かれた樹木のサイズ（「高さ」, 「樹木幅」, 「幹幅」）について、「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」との関連を調べるため相関分析を行った。その結果, 「感情調整」と【高さ】, 「肯定的な未来志向」と【樹木幅】との間に有意な弱い正の相関（順に, $r = .21$, $p < .01$; $r = .22$, $p < .01$ ）が認められた (Table 3)。

また, 「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」の各高群・低群とで、樹木画の位置における出現度数をまとめ (Table 4-1), 差が見られるかどうかを検討するため Fisher の正確確率検定を行った。その結果, 「感情調整」のみ左右において有意な差が認められ ($p < .05$), Ryan の多重比較の結果, 高群に【中央】が多く, 低群に【左寄り】が多かった ($p < .01$) (Table 4-2)。

2. 描画指標に見られる特徴

「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」の各高群・低群とで、樹木画の描画指標における出現度数をまとめ (Table 5-1), 差が見られるかどうかを検討するため, χ^2 検定または各セルの数値の小さいものは Fisher の正確確率検定を行った。統計的に有意であったものについては, その後さらに Ryan の多重比較を行った。その結果, 「新奇性追求」においては, 幹先端処理の開放型の下位分類で有意な差のある傾向が示され ($p < .10$), 低群に【閉鎖不全型】が多く見られた。「感情調整」においては, 樹冠のある／なしについて有意な差が認めら

Table 2 精神的回復力尺度下位尺度の平均値 (SD) と中央値

	平均値	中央値
新奇性追求	24.89 (4.81)	25
感情調整	28.06 (5.71)	28
肯定的な未来志向	16.95 (4.41)	17

Table 3 描画の大きさと精神的回復力尺度下位尺度との相関

	新奇性追求	感情調整	肯定的未来志向
高さ	.18*	.21**	.19*
樹木幅	.17*	.17*	.22**
幹幅	-.03	.18*	.07

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4-1 描画位置の出現度数 (%)

位置	上下	新奇性追求		感情調整		肯定的未来志向		合計
		高群 (n=79)	低群 (n=69)	高群 (n=85)	低群 (n=63)	高群 (n=83)	低群 (n=65)	
位置	上	18 (22.8)	15 (21.7)	17 (20.0)	16 (25.4)	16 (19.3)	17 (26.2)	33 (22.3)
	中央	52 (65.8)	50 (72.5)	59 (69.4)	43 (68.3)	59 (71.1)	43 (66.2)	102 (68.9)
	下	5 (6.3)	3 (4.3)	5 (5.9)	3 (4.8)	5 (6.0)	3 (4.6)	8 (5.4)
	不明	4 (5.1)	1 (1.4)	4 (4.7)	1 (1.6)	3 (3.6)	2 (3.1)	5 (3.4)
左右	左	4 (5.1)	9 (13.0)	3 (3.5)	10 (15.9)	6 (7.2)	7 (10.8)	13 (8.8)
	中央	72 (91.1)	59 (85.5)	79 (92.9)	52 (82.5)	76 (91.6)	55 (84.6)	131 (90.9)
	右	3 (3.8)	1 (1.4)	3 (3.5)	1 (1.6)	1 (1.2)	3 (4.6)	4 (2.7)

Table 4-2 「感情調整」の高群・低群における描画位置の出現度数 (%) と検定結果

位置	感情調整		p 値
	高群 (n=85)	低群 (n=63)	
左	3 (3.5)	10 (15.9)	.022
中央	79 (92.9)	52 (82.5)	
右	3 (3.5)	1 (1.6)	

Fisher の正確確率検定による p 値

Table 5-1 バウムテストの指標出現度数 (%)

		新奇性追求		感情調整		肯定的未来志向		合計	
		高群 (n=79)	低群 (n=69)	高群 (n=85)	低群 (n=63)	高群 (n=83)	低群 (n=65)		
描線	多重線	23 (29.1)	22 (31.9)	29 (34.1)		24 (28.9)	21 (32.3)	45 (30.4)	
	断線	6 (7.6)	5 (7.2)	3 (3.5)	8 (12.7)	3 (3.6)	8 (12.3)	11 (7.4)	
	一線	50 (63.3)	42 (60.9)	53 (62.4)	39 (61.9)	56 (67.5)	36 (55.4)	92 (62.2)	
幹先端処理	開放	27 (34.2)	31 (44.9)	28 (32.9)	30 (47.6)	29 (34.9)	29 (44.6)	58 (39.2)	
	開放型	完全開放型	0 (0.0)	1 (1.4)	0 (0.0)	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (1.5)	1 (0.7)
		先端漏洩型	3 (3.8)	0 (0.0)	1 (33.3)	2 (3.2)	2 (2.4)	1 (1.5)	3 (2.0)
		冠漏洩型	20 (25.3)	19 (27.5)	17 (20.0)	22 (34.9)	19 (22.9)	20 (30.8)	39 (26.4)
		閉鎖不全型	4 (5.1)	11 (15.9)	10 (11.8)	5 (7.9)	8 (9.6)	7 (10.8)	15 (10.1)
	閉鎖型	閉鎖	47 (59.5)	35 (50.7)	51 (60.0)	31 (49.2)	49 (59.0)	33 (50.8)	82 (55.4)
		冠型	23 (29.1)	20 (29.0)	30 (35.3)	13 (20.6)	23 (27.7)	20 (30.8)	43 (29.1)
		放散型	20 (25.3)	14 (20.3)	19 (22.4)	15 (23.8)	23 (27.7)	11 (16.9)	34 (23.0)
	その他	基本型	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
		その他の閉鎖型	4 (5.1)	1 (1.4)	2 (2.4)	3 (4.8)	3 (3.6)	2 (3.1)	5 (3.4)
その他		5 (6.3)	3 (4.3)	6 (7.1)	2 (3.2)	5 (6.0)	3 (4.6)	8 (5.4)	
幹表面の描写	幹表面の描写あり	54 (68.4)	52 (75.4)	63 (74.1)	43 (68.3)	55 (66.3)	51 (78.5)	106 (71.6)	
	幹表面の描写なし	25 (31.6)	17 (24.6)	22 (25.9)	20 (31.7)	28 (33.7)	14 (21.5)	42 (28.4)	
枝	枝あり	57 (72.2)	45 (65.2)	58 (68.2)	44 (69.8)	54 (65.1)	48 (73.8)	102 (68.9)	
	枝なし	22 (27.8)	24 (34.8)	27 (31.8)	19 (30.2)	29 (34.9)	17 (26.2)	46 (31.1)	
枝分枝	分枝あり	34 (43.0)	26 (37.7)	31 (36.5)	29 (46.0)	31 (37.3)	29 (44.6)	60 (40.5)	
	分枝なし	45 (57.0)	43 (62.3)	54 (63.5)	34 (54.0)	52 (62.7)	36 (55.4)	88 (59.5)	
根	根あり	41 (51.9)	39 (56.5)	44 (51.8)	36 (57.1)	43 (51.8)	37 (56.9)	80 (54.1)	
	根なし	38 (48.1)	30 (43.5)	41 (48.2)	27 (42.9)	40 (48.2)	28 (43.1)	68 (45.9)	
樹冠	樹冠あり	73 (96.2)	63 (95.7)	84 (98.8)	55 (87.3)	80 (96.4)	59 (90.8)	139 (93.9)	
	球型	球型	3 (3.8)	4 (5.8)	6 (7.1)	1 (1.6)	2 (2.4)	5 (7.7)	7 (4.7)
		雲型	46 (58.2)	38 (55.1)	52 (61.2)	32 (50.8)	54 (65.1)	30 (46.2)	84 (56.8)
	その他の型	24 (30.4)	24 (34.8)	26 (30.6)	22 (34.9)	24 (28.9)	24 (36.9)	48 (32.4)	
樹冠なし	6 (7.6)	3 (4.3)	1 (1.2)	8 (12.7)	3 (3.6)	6 (9.2)	9 (6.1)		
実	実あり	12 (15.2)	13 (18.8)	14 (16.5)	11 (17.5)	15 (18.1)	10 (15.4)	25 (16.9)	
	実なし	67 (84.8)	56 (81.2)	71 (83.5)	52 (82.5)	68 (81.9)	55 (84.6)	123 (83.1)	
葉	葉あり	17 (21.5)	16 (23.2)	18 (21.2)	15 (23.8)	16 (19.3)	17 (26.2)	33 (22.3)	
	葉なし	62 (78.5)	53 (76.8)	67 (78.8)	48 (76.2)	67 (80.7)	48 (73.8)	115 (77.7)	
花	花あり	0 (0.0)	1 (1.4)	0 (0.0)	1 (1.6)	1 (1.2)	0 (0.0)	1 (0.7)	
	花なし	79 (100)	68 (98.6)	85 (100)	62 (98.4)	82 (98.8)	65 (100)	147 (99.3)	
地平	地平あり	47 (59.5)	41 (59.4)	52 (61.2)	36 (57.1)	54 (65.1)	34 (52.3)	88 (59.5)	
	地平なし	32 (40.5)	28 (40.6)	33 (38.8)	27 (42.9)	29 (34.9)	31 (47.7)	60 (40.5)	
風景・付属物	風景・付属物あり	10 (12.7)	12 (17.4)	12 (14.1)	10 (15.9)	9 (10.8)	13 (20.0)	22 (14.9)	
	風景・付属物なし	69 (87.3)	57 (82.6)	73 (85.9)	53 (84.1)	74 (89.2)	52 (80.0)	126 (85.1)	
幹の傷	幹の傷あり	18 (22.8)	13 (18.8)	16 (18.8)	15 (23.8)	16 (19.3)	15 (23.1)	31 (20.9)	
	幹の傷なし	61 (77.2)	56 (81.2)	69 (81.2)	48 (76.2)	67 (80.7)	50 (76.9)	117 (79.1)	
陰影	陰影あり	11 (13.9)	5 (7.2)	11 (12.9)	5 (7.9)	8 (9.6)	8 (12.3)	16 (10.8)	
	陰影なし	68 (86.1)	64 (92.8)	74 (87.1)	58 (92.1)	75 (90.4)	57 (87.7)	132 (89.2)	

れ ($p < .05$), Ryan の多重比較の結果, 高群に【樹冠あり】, 低群に【樹冠なし】が多かった ($p < .01$)。さらに, 描線について有意な差のある傾向が示され ($\chi^2_{(2)} = 5.00, p < .10$), 低群に【断線】が多く見られた。また, 「肯定的な未来志向」においては, 描線に有意な差のある傾向が示され ($\chi^2_{(2)} = 4.70, p < .10$), 低群に【断線】が多く見られた。さらに樹冠ありの下位分類で有意な差のある傾向が示され ($p < .10$), 高群に【雲型】が多く見られた。なお紙面の都合上, 検定の結果, 差が有意あるいは有意傾向であったもののみ別に示した (Table 5-2, 5-3, 5-4, 5-5, 5-6)。

Table 5-2 「新奇性追求」の高群・低群おける幹先端処理「開放型」下位分類の出現度数 (%) と検定結果

幹先端処理 開放型	新奇性追求		p 値
	高群	低群	
完全開放型	0 (0.0)	1 (1.4)	.070
先端漏洩型	3 (3.8)	0 (0.0)	
冠漏洩型	20 (25.3)	19 (27.5)	
閉鎖不全型	4 (5.1)	11 (15.9)	

Fisher の正確確率検定による p 値

Table 5-3 「感情調整」の高群・低群おける樹冠の出現度数 (%) と検定結果

樹冠	感情調整		p 値
	高群	低群	
あり	84 (98.8)	55 (87.3)	.011
なし	1 (1.2)	8 (12.7)	

Fisher の正確確率検定による p 値

Table 5-4 「感情調整」の高群・低群おける描線の出現度数 (%) と検定結果

描線	感情調整		χ^2 値	p 値
	高群	低群		
多重線	29 (34.1)	16 (25.4)	5.00	.082
断線	3 (3.5)	8 (12.7)		
一線	53 (62.4)	39 (61.9)		

Table 5-5 「肯定的な未来志向」の高群・低群おける描線の出現度数 (%) と検定結果

描線	肯定的な未来志向		χ^2 値	p 値
	高群	低群		
多重線	24 (28.9)	21 (32.3)	4.70	.095
断線	3 (3.6)	8 (12.3)		
一線	56 (67.5)	36 (55.4)		

Table 5-6 「肯定的な未来志向」の高群・低群おける樹冠あり下位分類の出現度数 (%) と検定結果

樹冠あり	肯定的な未来志向		p 値
	高群	低群	
球型	2 (2.4)	5 (7.7)	.090
雲型	54 (65.1)	30 (46.2)	
その他の型	24 (28.9)	24 (36.9)	

Fisher の正確確率検定による p 値

3. 描画説明に見られる特徴

バウムテストについての自由記述について、以下のようにまとめた。

1) 何の木ですか

未記入の2名を除いた146名分を記述内容に従い分類した (Table 6-1)。その結果、最も多くみられた回答は、“りんごの木”, “桜” など、木の〈種類〉を記述したものであった (43.8%)。続いて多い順から〈特徴〉 (19.9%), 〈不特定〉 (19.2%), 〈場所〉 (11.6%), 〈不明〉 (5.5%) であった。その後、〈種類〉, 〈特徴〉, 〈場所〉は【具体的】な記述のもの (75.3%), 〈不特定〉, 〈不明〉は【非具体的】な記述のもの (24.7%) とまとめられた。

「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」の各高群・低群とで、【具体的】記述と【非具体的】記述の出現度数に差がみられるかどうかを検討するため χ^2 検定を行った結果、統計的に有意な差は見られなかった (Table 6-2)。

2) どうしてこの木を思いつかれたのでしょうか

未記入の1名を除いた147名分を記述内容に従い分類した (Table 7-1)。その結果、最も多くみられた回答は、“木は大きくて葉に覆われているイメージ”, “自分がイメージする木” など、木の〈イメージ〉によるものであった (26.5%)。続いて多い順から〈身近〉 (15.0%), 〈思いつき〉 (12.2%), 〈なんとなく〉 (12.2%), 〈好み〉 (7.5%), 〈描きやすさ〉 (6.1%),

Table 6-1 「何の木ですか」への自由記述 (n=146)

分類	例	数
具体的		110 (75.3)
種類	りんごの木, 桜, 楠の木, イチョウ, 針葉樹, どんぐりの木, 松, 広葉樹, 金木犀 など	64 (43.8)
特徴	大きな木, 青々とした木, 絵本やアニメによく出てくる木, 鳥の住む木, 枯れている木 など	29 (19.9)
場所	森にある木, 丘に生えている木, 街中にあるような木, 公園の木, 道端に立っている木 など	17 (11.6)
非具体的		36 (24.7)
不特定	一般的な木, どこにもある木, 特に決めていない, 特にこだわらない など	28 (19.2)
不明	わからない	8 (5.5)

(%)

Table 6-2 「何の木ですか」の具体的記述・非具体的記述について出現頻度 (%) と検定結果

	新奇性追求		感情調整		未来志向	
	高群 (n=79)	低群 (n=67)	高群 (n=85)	低群 (n=61)	高群 (n=83)	低群 (n=63)
具体的記述	64 (81.0)	46 (68.7)	67 (78.8)	43 (70.5)	61 (73.5)	49 (77.8)
非具体的記述	15 (19.0)	21 (31.3)	18 (21.2)	18 (29.5)	22 (26.5)	14 (22.2)
検定結果	n.s.		n.s.		n.s.	

〈思い出〉(6.1%), 〈季節〉(5.4%), 〈描きたい〉(3.4%), 〈教示通り〉(2.7%), 〈その他〉(2.7%)であった。その後, 〈イメージ〉, 〈身近〉, 〈好み〉, 〈描きやすさ〉, 〈思い出〉, 〈季節〉, 〈描きたい〉は【積極的理由あり】(70.1%), 〈思いつき〉, 〈なんとなく〉, 〈教示通り〉, 〈その他〉は【積極的理由なし】(29.9%)とまとめられた。

「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」の各高群・低群とで, 【積極的理由あり】と【積極的理由なし】の出現度数に差が見られるかどうかを検討するため χ^2 検定を行った結果, 「新奇性追求」について統計的に有意な差が認められ($\chi^2_{(1)}=8.66, p<.01$), (Table 7-2), 残差分析により, 「新奇性追求」高群に【積極的理由あり】, 「新奇性追求」低群に【積

Table 7-1 「どうしてこの木を思いつかれたのでしょうか」への自由記述 (n=147)

分類	例	数
積極的理由あり		103 (70.1)
イメージ	木は大きくて葉に覆われているイメージ, 自分がイメージする木, 一般的な木のイメージ など	39 (26.5)
身近	家の近くにある木だから, 一番見慣れている木だから, 最近テレビで見たから など	22 (15.0)
好み	安心感がある, 可愛い, 好き, 楽しい, 寂しくない など	11 (7.5)
描きやすさ	描きやすかった, 簡単, 描きやすそうな形, 描きやすさ重視 など	9 (6.1)
思い出	通っていた小学校にあった, 幼少期に登って遊んだ, 子どもの頃に見た など	9 (6.1)
季節	クリスマスが近かった, 寒い, 暖かさを求めて, 秋から冬に向かう時期 など	8 (5.4)
描きたい	大きい木が描きたかった, 自分の描きたいもの, 葉がいつもついている木を描きたかった など	5 (3.4)
積極的理由なし		44 (29.9)
思いつき	パッと思いついたから, ふと頭に浮かんだ, 思いついた木, 一番最初に思いついた など	18 (12.2)
なんとなく	なんとなく, 描いているうちにこうなった, 描いているうちに自然とこうなった など	18 (12.2)
教示通り	木を一本描けと言われたから, 木ということだったから など	4 (2.7)
その他	描いていたらブロッコリーみたいになった, 描き続けていたらおにぎりみたいになった など	4 (2.7)

(%)

Table 7-2 「どうしてこの木を思いつかれたのでしょうか」の積極的理由あり・積極的理由なしについて出現度数 (%) と検定結果

	新奇性追求		感情調整		未来志向	
	高群 (n=79)	低群 (n=68)	高群 (n=85)	低群 (n=62)	高群 (n=83)	低群 (n=64)
積極的理由あり	64 (81.0)	39 (57.4)	60 (70.6)	43 (69.4)	63 (75.9)	40 (62.5)
積極的理由なし	15 (19.0)	29 (42.6)	25 (29.4)	19 (30.6)	20 (24.1)	24 (37.5)
検定結果	$\chi^2_{(1)}=8.66, p=.002$		n.s.		n.s.	

極的理由なし】が多かった ($p < .05$)。

3) この木はどこに生えている木でしょうか

148名分を記述内容に従い分類した (Table 8)。その結果, 最も多くみられた回答は, “森”, “草原”, “大自然” など〈自然〉 (51.3%) であった。続いて多い順から〈公園・果樹園〉 (18.9%), 〈地域〉 (6.1%), 〈道・道沿い〉 (6.1%), 〈学校〉 (5.4%), 〈庭・家の周辺〉 (4.7%), 〈その他〉 (7.4%) であった。

「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」の各高群・低群とで, 各々の出現度数に差が見られるかどうかを検討するため χ^2 検定を行った結果, 統計的に有意な差は見られなかった。

4) この木に必要なものは何でしょうか

未記入の1名を除いた147名分の自由記述から得られた176個の記述を分類した (Table 9)。

Table 8 「この木はどこに生えている木でしょうか」への自由記述 (n=148)

分類	例	数
自然	森, 森林, 草原, 丘の上, 広い大地, 大自然, 平原, 山の中, 野原, ジャングル, 地面 など	76 (51.3)
公園・果樹園	公園, りんご園, りんご農園, 果樹園, 公園など人が集う場所 など	28 (18.9)
地域	外国, 青森, アメリカ北部などの寒い地域, ある程度温暖な地域, 暑い地域, 島の土地 など	9 (6.1)
道・道沿い	道, 道端, 街道沿い, 街に生えている, 整備された道路の脇に均等に生えている, 道路の横 など	9 (6.1)
学校	学校, 校庭, 運動場のすみ, 小学校の校庭の砂場, 通っていた小学校 など	8 (5.4)
庭・家の周辺	庭, 自分の家, 自分の家から徒歩でいけるくらいのところ, 広い庭の中 など	7 (4.7)
その他	喫煙所, 森から離れたところにある場所, ファンタジーアイランド, どこにでも など	11 (7.4)

(%)

Table 9 「この木に必要なものは何でしょうか」への自由記述 (n=176)

分類	例	度数
光合成	太陽と水と二酸化炭素, 日光・水・空気 など	39 (22.2)
栄養	肥料, 日光, 水, 養分, 光, 栄養, 太陽の光 など	38 (21.6)
仲間	鳥, 小動物, 動物の仲間, 鳥とか人とか周りの生物, 仲間の木 など	30 (17.0)
成果物	実, 花, 果物 など	13 (7.4)
環境	風に吹かれている, 地面, 暖かい気候 など	11 (6.3)
構成物	枝, 葉, 葉っぱ など	10 (5.7)
支援	手入れ, 剪定, 育ててくれる人, もっと大きくなるため無駄な枝を切る など	6 (3.4)
安定	安定感, 貫禄, たくましさ, 堂々さ, 安心感 など	5 (2.8)
なし	特に何もいらない, もう全部揃っている, ない など	13 (7.4)
その他	ブランコ, 色, 自分の画力, リアリティー, 魔法の力 など	11 (6.3)

(%)

その結果、最も多くみられた回答は、“太陽と水と二酸化炭素”など、“太陽”、“水”、“二酸化炭素”などを組み合わせた〈光合成〉(22.2%)であった。続いて多い順から〈栄養〉(21.6%)、〈仲間〉(17.0%)、〈成果物〉(7.4%)、〈環境〉(6.3%)、〈構成物〉(5.7%)、〈支援〉(3.4%)、〈安定〉(2.8%)、〈なし〉(7.4%)、〈その他〉(6.3%)であった。

「新奇性追求」,「感情調整」,「肯定的な未来志向」の各高群・低群とで、各々の出現度数に差が見られるかどうかを検討するため χ^2 検定を行った結果、統計的に有意な差は見られなかった。

考 察

1. バウムテストと「新奇性追求」「感情調整」「肯定的な未来志向」との関係について

本研究で、バウムテストにみられる読み取り指標および描画後の説明とレジリエンスとの関係を検討し、精神的回復力尺度の下位尺度ごとに以下のような結果が得られた。

「新奇性追求」については、幹先端処理における開放型の下位分類に、高群と低群との間に差のある傾向が示され、低群に【閉鎖不全型】が多いことが推測された。岸本(2002)による幹先端処理の分類に対し、佐渡他(2009)は、木の下から湧きあがってくるエネルギーに対してどのように描き手が対処しようとしたのかという《動き》と、描き手がどのようにエネルギーと折り合いをつけて木としてまとめたかという《おさまり》の双方を量的に処理し得ると述べている。【閉鎖不全型】は、葉や枝で幹の先端を覆い隠そうとはしているが、失敗しているといえる。「新奇性追求」の低い人は、新しいことを試みることに消極的で興味関心が低く、湧き上がってくるエネルギーを積極的に隅々まで行き届けることへの関心や意識も低いと考えることができるかもしれない。

他方、描画説明において、「新奇性追求」の高群に、なぜ描画した木を思いついたかについて“自分がイメージする木〈イメージ〉”、“家の近くにある木だから〈身近〉”、“好きだから〈好み〉”といった【積極的理由あり】が多い結果であった。このことから、彼らの興味や関心の高さ、新しいことへのチャレンジ精神が、そのまま課題に取り組む姿勢に反映されているように考えられた。

「感情調整」については、その得点と樹木の【高さ】との間に弱い正の相関が認められた。描かれた樹木のサイズが大きいことは自尊心や活動性の高さなどと、サイズの小さいことが自信のなさや精神的なエネルギーの乏しさなどと関連づけて解釈される(高橋・高橋, 1986)。このことから、自分の感情を適切にコントロールできる人ほど、豊かに感情を表現し、自信や自尊心を携え、大きく高く描画することが考えられた。また、「感情調整」高群は、描画位置の【中央】に描かれることが多い結果であったことから、自分の感情をうまく制御できる

人たちは、空間が象徴する左側の過去や受動性、右側の未来や積極性 (Bolander, 1977/1999) の間で、自身をバランスよく保つことができるのだと考えられた。一方、低群は【左寄り】の位置が多く、そのバランスがうまく保てず、感情や内面を象徴する左側 (高橋・高橋, 1986) に寄ったものと考えられる。加えて、低群は【樹冠なし】が多い結果であった。樹冠は、精神的・知的発達、興味の範囲、満足の対象 (Bolander, 1977/1999)、内的衝動や感情を統制する理性や精神生活 (高橋・高橋, 1986) と関係しているとされている。よって、感情のコントロールがうまくいかない人の中には、樹冠を描けない人もいたのではないかと考える。さらに低群は描線の【断線】が多く見られる傾向が示されたが、感情や情緒のコントロールのうまくいかなさにより、直線で長く持続したラインを描くのが難しく断線になったためだとも推測される。

「肯定的な未来志向」については、その得点と【樹木幅】との間に弱い正の相関が認められた。【樹木幅】の測定値は、そのほとんどが樹冠の横幅となっており、樹冠の大きさとも連動していると捉えることができるだろう。また、「肯定的な未来志向」高群は、樹冠の形で【雲型】が多い傾向が示された。樹冠は先述のように、興味の範囲、満足の対象と関係しており、また空間的にも精神領域や未来、目標を象徴する (Bolander, 1977/1999) 上部を占めている。ここで滑川・横田 (2017) は、樹冠の幅と抑うつとの間に有意な負の相関を示しているが、「肯定的な未来志向」の高い人は、明るくポジティブな未来を予想し、前向きな展望を持ち続けられる人たちであり、樹冠も大きく描き、樹木幅も大きくなったことが考えられた。そして、豊かな感受性や丁重さ、同調性示す (高橋・高橋, 1986) とされる【雲型】の樹冠がより多く描かれる傾向が見られたのだと考えられる。一方、明るくポジティブな未来が容易に予想できず将来に希望を持ちにくい「肯定的な未来志向」低群は、その自信の欠如や無力感から、【断線】が多い傾向が示されたと考えられる。

2. バウムテストの描画説明について

今回、バウムテスト描画後の説明を自由記述で尋ね分類したことで、一般大学生が描くバウムテストの概要を改めて把握することができた。その中で、約75%の人が何らかの具体的な樹木を思い描いており、また木を描く際に、身近にある木や小さい頃の思い出の場所にある木など、約70%の人がある程度積極的な理由でもってその木を描いていることが明らかとなった。

また、木が生えている場所についての質問では、最も多く見られた回答が〈自然〉に分類されるものであったが、“森”、“草原”、“山の中”など、他にも多くの木がある中での一本の木を思い描く人が多いことも発見であった。以前に比ベー軒家が減り、街に緑が少なくなってきたと言われて久しい現在において、バウムテスト実施においてもその環境が影響を及ぼすことが容易に想像されたが、今回の結果から、各人の心象風景を元に樹木が描かれている

ことが改めて示されたと言えるだろう。

さらに、描いた木に今後必要なものを尋ねた質問では、〈光合成〉に分類されたものが最も多く、“日光”、“水”、“肥料”などの〈栄養〉も合わせると4割以上であり、さらに樹木が大きく育つことへの期待が伺われた。また、“手入れ”、“剪定”、“育ててくれる人”など〈支援〉に分類された内容については、臨床現場において、新たに心理面接導入の必要性や可能性、あるいは現在行われている心理面接への意味づけとして、一つの重要な視点となると考えられる。

3. まとめと今後の課題

本調査では、バウムテストと、レジリエンスを導く心理特性として精神的回復力尺度の下位尺度である「新奇性追求」, 「感情調整」, 「肯定的な未来志向」との関係を検討した。当初、レジリエンスの強さは、サイズの大きさや用紙空間における右側よりの描写、幹先端が閉じていることなどに示されることが予想されていた。バウムテストのいくつかの指標との間で関係が見られた中で、特に「感情調整」、つまり自分の感情をうまく制御できることに関する側面が、樹木の高さ、描写位置、樹冠の有無、そして描線など、バウムテストに投影されやすいことが示唆された。平野（2010）は分析の結果、感情などコントロールされにくい部分を統御する「統御力」を、資質的な性質の強いレジリエンス要因として位置付けている。これを今回測定された「感情調整」に当てはめて考えるならば、先に見られた「感情調整」と関係があると思われる描画特徴は、その時の気分により大きく変化するものではなく、個人の中である程度の一貫性が見られる特徴であるかもしれない。さらに、描画後の説明に関する質問からは、描画を描いた者が今必要としていることや、課題への取り組み姿勢などが伺われ、描画後の質問の重要性が再確認された。また、一般大学生のバウムテストの描画説明に関する貴重な資料を提供することができたと言えるだろう。

今後の課題として、レジリエンスには様々な要因が含まれているため、今回使用した尺度以外で把握できなかった要因や側面について、さらなる検討が必要であることが挙げられる。また、バウムテスト研究について佐渡（2010）は、これまでほとんどが描画の結果に注目した描かれたバウムに関するものであり、表現の過程にも注目した描かれるバウムに興味を持つことの意義を述べている。そして本来、臨床現場においてバウムテストは、全体像から総合的に解釈を行うものである。以上を踏まえ、バウムテストの描かれ方に注目した個別実施での検討や、バウムテストの全体像を捉えられるような新たな方法の検討も必要である。

引用文献

- Bolander, K. (1977). *Assessing personality through tree drawings*. Basic Books, N.Y. (ボーランダー, K. 高橋依子 (訳) (1999). 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版)
- Grotberg, E. H. (2003). What is resilience? How do you promote it? How do you use it? In Grotberg, E. H. (Ed.), *Resilience for today: gaining strength from adversity*. Westport, Praeger Publishers, 1-29.
- 平野真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得要因の分類の試み ——二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成 パーソナリティ研究, 19, 94-106.
- 井手正吾・岩渕次郎 (1991). 樹木画のサイズと位置についての検討 ——臨床描画法に関する研究 (1)—— 旭川医科大学紀要, 12, 61-71.
- 石毛みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連 ——受験期の学業場面に着目して—— 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 岸本寛史 (2002). バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群 心理臨床学研究, 20, 1-11.
- Masterson, A. S., Best, K. & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcame adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.
- 中島ナオミ (2002). わが国におけるバウムテストの教示 日本描画テスト・描画療法学会編, 臨床描画研究, 17, 177-189.
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2017). バウムテストの表現に関連する抑うつ症状について 日本描画テスト・描画療法学会編, 臨床描画研究, 32, 143-156.
- 長内 綾・古川真人 (2004). レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 7, 28-38.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長嶺伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 ——精神的回復力尺度の作成——, カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2009). バウムテストの幹先端処理に関する基礎的研究 大学生のバウム画より 心理臨床学研究, 27, 95-100.
- 佐渡忠洋 (2010). 日本におけるバウムテストの研究 臨床心理学, 10, 金剛出版 pp. 674-679.
- 佐渡忠洋・坂本佳織・岸本寛史・伊藤宗親 (2010). 日本におけるバウムテストの文献一覧 (1958-2009年) 岐阜大学カリキュラム開発研究, 28, 33-57.
- 高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト 北大路出版
- 高橋雅春 (1994). HTTPテストにおける樹木画 日本描画テスト・描画療法学会編, 臨床描画研究IX, pp. 60-72.
- 山中康裕 (1976). 精神分裂病におけるバウムテストの研究 心理測定ジャーナル, 12, 18-23.

Abstract

Relationship between features and drawing description of the Baumtest and resilience

Emi Kodama, Kazuko Yoshioka and Masako Ishizaka

The purpose of this study was to examine the relation between indexes of the Baumtest, its drawing descriptions, and three subscales of the Adolescent Resilience Scale including “Novelty Seeking,” “Emotional Regulation,” and “Positive Future Orientation” that have deep relations with resilience. The results showed significant relationships between “Novelty Seeking” and presence of specific reason for drawing the tree, “Emotional Regulation” and the height and position of trees, presence or absence of tree crown, then “Positive Future Orientation” and the depth of trees. It is indicated that “Emotional Regulation” was most projected on the Baumtest among the three subscales. Additionally, it was suggested that the drawing description of Baumtest implied needs of drawers now and attitude to address a task, and so we reconfirmed the importance of drawing descriptions in the Baumtest. Further, we presented valuable Baumtest data of popular students.

Keywords: Baumtest, drawing description, resilience